

第69回 防災カフェ（Web）を開催しました。



梅雨に備える水害復旧の知識

～風水害が一番多い夏の前に備える防災～

日時：2022年5月27日（金）18時30分～20時30分

ゲスト：前原 土武さん（災害 NGO 結～yui～代表）

ファシリテータ：西谷 明日希 さん（災害 NGO 結～yui～事務局）

梅雨から台風シーズンと、夏から秋にかけては、風水害の発生確率が高くなります。気候変動の影響で「観測史上最大」の雨も珍しくなくなってきました。実際に災害にあってしまったらどうしたらいいのか？今回は、水害にあったときに、何をすればいいのか？家の中の構造の話なども交えて解説いただきました。

災害とは？被害とは？

私は、2011年の東日本大震災から災害支援に携わるようになりました。主に現場活動の総合的なコーディネートをしています。災害時の被害は、人的被害、家屋被害、産業被害に分けることができますが、今回は家屋の被害について詳しくお話しします。



ゲスト：前原 土武 さん

被害は自然の力が作り出すと思いがちですが、そこに人間社会が重なった時に、被害をもたらし、それを災害と言っています。例えば、台風は上陸すると大きなニュースになります。どこで起こり、どのような被害になるのかということは、地域の環境や状況によって異なります。若い世代の多い都市部と田舎で高齢者の多い地域では、被害への対応能力も変わってきます。どのような地域に住んでいるのかを考えることも防災です。

被害とは生活の環境が自然の力で著しく下がってしまうことです。そこから復旧・復興にもっていくことが重要です。被害に遭われた方によって復旧・復興のスピードが違います。

阪神・淡路大震災が起こった1995年は災害ボランティア元年と呼ばれています。NPO法ができ、市民活動が活発になりました。そして2004年の新潟県中越地震の際に、ボランティアの方をうまくフォローできるように災害ボランティアセンターができました。2011年の東日本大震災の際には、千葉から青森までの太平洋沿岸部のすべての自治体で災害ボランティアセンターがつけられました。その後、熊本地震や全国各地の豪雨など大規模な災害が次々と発生しました。大量の土砂や重量物の除去には、プロボノと呼ばれるテクニカルボランティアや技術系ボランティアの存在

が必要不可欠であることが明らかになりました。

しかし、コロナ禍となり、全国各地からボランティアの方を募集することができなくなりました。土砂や廃棄物の撤去にも時間がかかるようになりました。どのように片付けていくのかを官民で連携して考える必要があると思います。復旧が長引けば、地域の復興も遅れることとなります。

水害に備えて

私たちは水害が起こる前に何を備えなければならないのでしょうか。災害が起きても、被害を少

平時から出来る事を

平時に出来ない事は
有事（災害時）にも出来ません。
平時から出来る事を
増やし課題を解決出来る力を
備えましょう。
それが地域の力に変わります。



しでも減らせれば地域の復興に繋がります。死者の出た水害と死者の出なかった水害では対応のスタートが違います。防災をしっかりと整えていくことで、復興に向かうスピードが加速していきます。地域の復興のためにも防災は重要となります。

私たちも平時の時から被災地支援に向けて訓練や練習をしています。普段から地域で互いにあいさつをしたり、声掛けしている人は、災害時も顔が繋がっているので、助け合いができますが、地域のつながりが弱いと災害時に助け合うことは難しくなります。平時から何が出来るかということが、有事（災害時）に何が出来るかに繋がります。避難所はゴールではなく、スタートラインなのです。復旧や復興をイメージした防災が必要です。水害が起きた後、家をどのように修理していくのかを知っておくだけで、自分の家の再建は早くなります。ご近所の高齢者の方のお手伝いもできるようになります。

マイタイムラインをご存じですか？災害が起きる前に、自分は何をどういうスケジュールで行っていくのかという計画を立てる事です。まずハザードマップをチェックします。これを見ることで備えの指針が出てきます。市町村のホームページなどから探してみてください。自宅だけでなく、職場や学校、保育園もチェックしておくといいでしょう。過去に災害が起こったところは再度起こる可能性がありますので、地域の歴史を知ることも大事です。雨の強さ、降り方など気象情報をチェックすることも重要です。地域や家族でぜひマイタイムラインづくりに取り組んでみてください。

家屋の構造を知っておく

（会場に原寸大の畳一畳分の床下や壁の内側を再現した模型を組み立てていただきました。）

模型を使って説明します。水害では、どこまで水位が上がったかによって被害が変わります。災害時には、ボランティアや住民で床下の束や根太などを撤去し、更に泥を除きます。床下が土かコンクリートなのかも重要になりますから、床下点検口や家の外からどうなっているかを確かめてみてください。

現場で使う資機材としてはいろいろなものがあります。よく



使うものにスコップや一輪車がありますが、工具ではハンマーやバール、のこぎり、ペンチなども災害時には役に立ちます。暗いときでも作業できるライト付きヘルメットも便利です。両手で作業できるので、災害時だけでなくアウトドアでも活用できます。充電器も便利で、長時間の携帯電話の利用も可能になります。発電機、水を抜くときに使う水中ポンプ、風を送るダクトファン、消毒するときの噴霧器などの道具の使い方を理解しておくことは人を助けるスキルになります。地域の自主防災で用意されても良いと思います。

浸水しても、水は半日くらいで引きます。濡れたものは片付ければ済みますが、壁の中の断熱材が濡れていると、クロス裏側にカビが生えてきたりします。壁を撤去して、断熱材を取り外します。床下がコンクリートだと水が溜まっている可能性があります。水を取り除かないといつまでも湿気が残りますから、水中ポンプや塵取り、スポンジを使って水を取り除いていきます。カビが発生すると健康被害にも繋がり、部材が使えなくなった分、撤去範囲が増えることになります。木材も集成材は水に浸かると剥がれてしまいますが、一本の木から切り取られた木材は再利用も可能です。災害前から自宅の床下や畳の下を調べておくと、災害時に対応できるようになります。

生活再建の手順

右の復旧ロードマップ (<https://saigainetokayama.org/>) は災害支援ネットワークおかやま被災家屋支援チームと一緒に作ったものです。左から右に時間軸が流れていきます。片付ける前に写真を撮ります。罹災証明をもらい、家の片付けを始めます。家財を出し、壁を剥がし乾燥させるなどです。そして生活再建の計画となりますが、被災者の再建計画は様々です。大きな家でも家族が少なくなっているのならば、必要な部屋だけを直して、後は倉庫のようにすることでリフォーム費用を減らすことができます。一部損壊の時でも罹災証明はもらえます。罹災証明が基本的な全ての支援の物差しになりますので、片付ける前に写真を撮っておきましょう。



次に必要なものと不要なものを仕分けします。デジタルデータになっていない昔の写真、例えば結婚式の写真や家族の写真などは災害で失ってしまうと思いが無くなり、喪失感に繋がることもあります。今のうちからデジタル化しておくことも防災になります。



震災がつなぐネットワーク (<https://shintsuna.org/>) が作成している水害後の家屋への適切な対応も、作業する際にはとても役に立ちます。水害があった時に①床下の確認②壁材のチェック③消毒④乾燥という再建の手立てを確認できます。床を張り替えると経費もかさみますから、消毒だけをして様子を見たケースもありました。その人に合わせてどう

するのかを考えています。床下の泥は災害後一か月経過してもベトベトとしていますから、放置しておくとかびが生えてきます。家の構造を知らないと思うように修繕はできません。

まとめ（備え）

平時にできることしか、有事（災害時）にできません。平時の時から、工具が使えるようになっている、家の構造を知っている、地域の方とコミュニケーションが取れる関係性がつくれていることが大切です。少しでも被害を減らすことが地域の復旧に繋がります。人的被害を減らし、家屋もカビが生えないよう早く撤去すれば再建も早くなります。社会情勢も変化しています。木材の単価が高騰していますので、水害被害を受けた時の家の再建費用も騰がってきています。気象現象も変わってきていますから、私たちもどう向き合っていくのかを状況に応じて考える必要があります。



みんなで力を出し合っていくときには、援助を受ける力、つまり受援力が重要です。最大のピンチの時に助けを受け入れる体制を整えるということです。災害が起こってからでは受援力は高まりません。平時から相談できる関係をつくっておくと受援力が高まります。

昔は家族の人数も多かったので、家族で助け合うことができましたが、世帯の縮小と単身化が進んできたことで、地域の助け合いが求められました。しかし地域の高齢化、若者の都市部への流出、自治会に加入する所帯も減っているなど、うまく機能しなくなっています。

そこで、阪神・淡路大震災の後、ボランティアなど外から助ける力を高めようとして、ボランティアセンターがつけられました。しかし、コロナ禍となり、外からの支援を受け入れることが難しくなりました。行政だけではうまくできないこともあります。だからこそ、連携して助け合って乗り越えていかないといけない時代になりました。連携をするためには、行政、社協、NPOの性質をよく理解しておくことです。相手のことを理解できれば相談ができ、話し合いができるようになります。多くの人と繋がり、連携していくことが重要になります。技術系ボランティアという人たちがいるということ、支援団体があるということを知っておくことも重要です。被災者を中心に考えながら、地元の方の力で復興できるように、外部支援者は連携し、協働していくことが重要だと考えています。

参加者からは多くの質問がありました。その一部を紹介します。

問：今までの災害現場経験から、マスコミに望むことはありますか？

答：多くの情報の中に埋もれてしまい、被災地のことが忘れられてしまいます。災害直後は多くのマスコミが取材に来られますが、復興まで5年10年かかるので、小まめに取材して関心を持ち続けてほしいです。私たちもYouTubeでの活動報告など工夫をしています。

問：もし家が被災して、ボランティアをお願いしたい場合、滋賀県の各市町村の社会福祉協議会またはボランティアセンターに電話などで依頼するのでしょうか。そのような組織が一般ボランティアを派遣するのか、技術系ボランティアを派遣するのかを決定するのでしょうか。

答：災害が起き、激甚災害や災害救助法が適応されたりすると、市町村の社会福祉協議会が災害ボランティアセンターを立ち上げるかどうかを判断します。自分の家が被災した場合は、まず勇気をもって助けてと相談することです。災害や地域での違いもあります。区長さんが聞いて回ったり、災害ボランティアセンターを設立したというチラシを配布したり、回覧板で回したりされていますので、情報をチェックしてください。高齢者は情報弱者になりがちですから、近所の方が助けてあげてほしいです。

問：「受援力」を高めるためのキーパーソンは、どのような立場の人で、どのような考え方が重要ですか？

答：目配り気配りができる人、地域の世話好きであまり頑固でない人がいいのかなと思います。普段から地域の中で動いている自治会長や民生委員さんといった方がキーパーソンになりやすいと思います。地域の繋がりや事情もあると思いますが、多面的にキーパーソンを見ることも大切です。

問：高齢化が進む中で、広域避難所が遠く、「避難しよう」と声をかけても「自宅にいる」と言われる方に避難してもらえようにするには、どうすればよいのでしょうか？

答：避難して空振りすることも多くありますが、素振りと考えて、練習できてよかったと思うようにしてください。避難所がより楽しい場所になればよいとも思います。映画会やカラオケ大会などのイベントを組み入れるのも一つの方法かもしれません。自分のためだけではなく、地域のために、みんなのために避難するという呼びかけや仕組みづくりも大事だと思います。

問：要支援者とされる人達と情報を共有し行動するためのアドバイスをお願いします。

答：個人情報の問題がありますので、できないこともあります。挨拶したりするなど、普段からのコミュニケーションをどれだけとっているかということになります。地区が大きくなるとうまくいかないこともあります。避難行動計画などを地域の中でワークショップをして理解しておいたほうが良いと思います。要支援者や高齢者など逃げ遅れたり、命の危険にさらされやすい人が地域の中で見えにくいこともありますから、普段からどこにそういう方がいるのかを知っておくことだと思います。

前原さん、西谷さん、参加者のみなさん ありがとうございます。



ファシリテータ 西谷 明日希 さん